

## 熊本での蘆花研究の現在

熊本県立大学教授・副学長 半藤 英明

一

熊本県立大学は、地方の公立大学として、ミッシヨン（の一つ）に地域貢献を謳っている。縁あって熊本の地に集った学生たちの地域理解を促進し、自らの立場を固めつつ応用力を高め、多角的かつ広範囲に思考できる人間の養成を目指し、文学部、環境共生学部、総合管理学部の人文・自然・社会系の三学部が、学問上の普遍的価値の追究に加え、地域研究を推進している。

平成二〇年、文学部では熊本は水俣出身の明治期の文豪である徳富蘆花の生誕一四〇年を記念し、日本語日本文学科が中心となって外部からの客員研究員を含む「熊本県立大学蘆花研究プロジェクト」を組織し、徳富記念園、蘇峰記念館などの諸機関とも連携をはかりながら研究活動を開始した。熊本にある日本語日本文学科の特色づくりとして徳富蘆花研究に着目したものである。年間を通じて資料収集や作品研究に取り組み、また、熊本県内の蘆花関係資料

の目録作りや県民向けのシンポジウムを行い、それらを熊日新書『至宝の徳富蘆花』（平成二十一年）にまとめて刊行した。未翻刻書簡の紹介やシンポジウムの様子を伝えた当時の新聞記事（朝日、毎日、読売、熊日、西日本の各紙）が、その活況ぶりを示している。

文学史的にいえば歴史的潮流から孤立した蘆花であるが、今日的に見て彼の作品群は、文化論的にも思想的にも、再評価に値する。作品の端々から、明治期におけるキリスト教の受容、家族制度、天皇への意識の問題などが読み取れる。それらをいかに評価するのかにより、明治・大正期の歴史的評価にも新たな照射をもたらすであろう。

語学に堪能であったとされる蘆花は、その証しともいべき翻訳、翻案と共に、かの評伝『トルストイ』を残した。小林秀雄によれば、トルストイは「真正直」で「健康」、かつ「鋭敏」で「合理的な野生児」である（新潮文庫『人間の建設』、平成二十二年）。そのあたりに、蘆花のトルストイへの憧憬が向けられていたかもしれないと思うが、蘆花の宗教観がトルストイ的であったのかは具体的に検討しなければならぬ課題であると思う。

そのトルストイを訪ねた「順礼紀行」の旅で「生活から生みだすようなものを書け」「君は百姓ができるかね」などと論されると、蘆花は帰国後に東京・粕谷で「美的百姓」（『趣味の百姓』）の生活を始めた。当時の粕谷は未だ

京王線が開通しておらず、民家もまばらで、周囲に山はないものの生誕地の水俣を髣髴とさせる自然豊かな土地である。その居住地が世田谷の蘆花恒春園である。

## 二

明治初期の熊本は、ご多分にもれず、近代化・西洋化を信望した。一一五年続いた藩校時習館を明治三年に閉鎖し、翌四年に白川県知事となった細川護久（肥後熊本藩一二代最後の藩主）が城内に熊本洋学校を設立した。アメリカの退役軍人ジェーンズが横井小楠の縁者の招きにより教師として赴任すると、英語を始め、数学、地歴、物理、化学、生物、天文、地質などの教科をすべて英語で教える西洋式教育が始まった。「肥後の猛婦」として名高い横井みや子、徳富初子の入学もあり、熊本洋学校は日本での男女共学のはしりともなった。明治天皇は明治五年の九州巡幸の際、ここを訪れている。

ところが、明治九年、キリスト教に目覚めた学徒たちの奉教結盟が契機となり、熊本は混乱し、かの熊本洋学校は閉鎖された。徳富蘇峰、横井時雄（小楠の長男、同志社三代社長）、海老名弾正（同八代社長）ら、のちに「熊本バンド」と呼ばれた学徒たちは設立直後の同志社英学校に学ぶことになる。兄蘇峰を追って蘆花も同志社に学ぶが、蘇

峰は「同志社在学中は、予が直接に彼の教育の任に当つたが、従来我儘放題に放任して置いた当人を、予の流儀でピシシ訓練を施したから、彼に取つては余り有難くは思はなかつたであらう。」（中公文庫『弟富蘆花』、平成一三年）と書く。しかし、そのような同志社の生活のなかで、蘆花は語学への関心、能力を育んでいったのではないか。蘆花の翻訳、翻案は蘇峰の勧めによるものであった。なれば、蘆花とトルストイとの邂逅までには実に蘇峰の影響が大きかったことになる。

## 三

熊本由縁の蘆花であるが、蘆花の人生的な拠点は熊本ではなかった。現在の熊本で蘆花関連の史跡は、熊本市の大江義塾跡（現、徳富記念園）、水俣市の徳富兄弟生家、蘇峰記念館などであり、ほかに各地に石碑があるが、熊本と蘆花の関係の深さは、主に蘆花の精神的なものにあつたと筆者は見る。例えば『みみずのたはこと』では、郷里熊本の猛暑を振り返りながら「昼夜の懸隔する程、夏は好いのである。」と懐かしげに語る。『思出の記』では、主人公の菊池慎太郎の人物設定に妻愛子の出身地である菊池の風物を当てはめる。随想『新春』には「日蓮さんと趣味で、柑橘が私は一番好きです。」とあるが、その嗜好

は幼き記憶の反映だろうか、柑橘類は現在も水俣の特産品である。そして、愛子との共著となる自伝的小説『富士』には「見馴れた肥後平野や周囲の山々も、丘の上から見れば今新に見るかのやうであつた。」と郷里との微妙な心の距離をもらしながらも、「肥後熊次」「菊池駒子」「宇土君」「伊倉家」「本山家」「本荘さん」と人物名に熊本由縁の地名が続出する。

「熊次は自然が好きであつた。」(『富士』)とは蘆花自身の本心と見られるが、なれば、蘆花の自然観は蘆花研究の重要テーマとなる。次掲は、蘆花の自然観が蘆花らしい表現の巧みさで表れていると筆者が注目する文章である。

農の弱みは女の弱みである。農の強みは女の強みである。蹂躪される様で実は搭載し、常に負ける様で永久に勝つて行く大なる土の性を彼等は共に具へて居る。

(『みみずのたはこと』)

#### 四

手前味噌ではあるが、平成二〇年の「徳富蘆花生誕一四〇年シンポジウム」以来、熊本での蘆花をめぐる研究活動、とりわけ啓蒙的な取組が活発化した。研究者による講演会や「熊本蘆花の会」の諸活動がますます注目され、

熊本市・菊池市などでの読書会、蘆花が試行したエスペラントをめぐる研究会が回を重ね、関連史跡を訪ね歩く文学散歩も催されている。昨年九月には毎年の命日に徳富記念園で開催される蘆花祭の日にあわせ、熊本市と熊本県立大学が共催する初めての「徳富蘆花検定」を実施した。多くの方々に地域理解を深めていただき、とくに県民に対しては郷土愛を育んでいただくことを願うものである。

前記の「熊本県立大学蘆花研究プロジェクト」も資料収集と精力的な調査、分析に励み、教育の場での還元にも力を注いでいる。郷土の文学者とは言え、明治期の作家がかくも継続的に広く関心を持たれ、熊本の文化的な町おこしに幾分かでも役立っているであろうことは、とかく個人的、閉鎖的、微視的になりかねない文学研究のあり方を見直す機会として、提起するものを持っているといえるだろう。

平成二三年は、明治政府により社会主義者らが摘発、起訴、処刑された大逆事件から一〇〇年の年である。今日でも「謀反論」と題して「新しいものは常に謀反である。」「肉体の死は何でもない。恐るべきは靈魂の死である。」「我々は人格を研くことを怠つてはならぬ。」と訴えた蘆花の歴史観は興味深く、熊本では注目が集まっており、研究者による講演会などが催されている。ともすれば蘇峰との確執や愛子との異様な夫婦関係に引きずられがちな熊本での蘆

花評であるが、先入観のない蘆花の評価が必要である。筆者とすれば、蘆花の思想形成においてトルストイの平和主義はいかにリンクするのかわかるといった興味を傍らに、この「謀反論」再評価の動きは、蘆花の歴史観、人間観が今後の蘆花研究のテーマとなることを、ほぼ間違いないで示している。

〔付記〕 本稿は、昭和女子大学日本語日本文学科特別公開授業（平成二十三年六月四日、於、昭和女子大学オーロラホール）の内容に基づいている。なお、文中の引用は『蘆花全集』（新潮社内蘆花全集刊行會）の各巻他に拠るが、頁数は省略し、新漢字を使用した。

